

年 組 名前：

手すきから機械へ 時代に合った商品生産



昭和から平成にかけての和紙産業の変遷について著した小林弘史さん
＝市川三郷町内

峡南

手塚美菜子
小林 諒一
(0556)22-5431, 5432
FAX 22-1797

市川和紙
変遷たどる

元試験場研究員が出版

小林弘史さんは1977年から今年3月まで、町立製紙試験場に研究員として勤務。新製品の研究開発を担当した。昭和20年代までの製紙の歴史は郷土史家の村松孝氏が書いていた「市川紙業史」などに記されているが、以降の製法や歴史についてまとめた本はないことから5年ほど前に執筆を始めた。

小林さんによると、本にまとめた昭和中期から平成は、町の製紙業が手すきから機械すきへと変遷した時代。本は「市川大門」「手漉き和紙」の変遷、「市川大門」「機械抄き和紙」の変遷、「総集編 市川和紙に関する諸事項」の3部で構成している。

紙すきの原料であるコウゾやミツマタなどが戦中・戦後に不足し、桑皮やマニラ麻ロップの廃材などが利用されたことや、現在ではブドウの剪定枝を用いた紙があることを紹介。最も活況を呈した昭和30年ごろには、酢酸ビニルを添加したヒール障子紙の一大産地となったことも記している。

このほか、江戸時代に御用紙として徳川家に納められた「肌よし紙」の再現を試みた様子、神明社(同町市川大門)で紙の神である天日鷲命をまつていることなど幅広く掲載している。

「時代に合った商品を提供するため、業界や職人が試行錯誤した様子を伝えたかった」という小林さん。試験場で働いた自身の経験を踏まえながら「先輩や同僚への感謝の気持ちも込めて執筆した。和紙に興味がある人にはぜひ読んでほしい」と話している。

B5判200頁。町内の図書館や学校、県立図書館などに寄贈する予定。

問1

市川の製糸業は昭和中期から平成にかけて、すき方がどう変遷しましたか。

問2

戦中・戦後、紙すき原料のコウゾやミツマタが不足した時に利用された材料は何ですか。

問3

「山梨県 市川和紙の昭和平成史」を自费出版した小林弘史さんは、どのような思いで、本を執筆しましたか。

(2020年9月8日付 山梨日日新聞 19面)